

湯あがりの髪のほつれもかきあくる脛にかゝる春の淡雪  
故郷の近き山なみうちくもり小雪亂れて降り出てにけり  
うつゝなの君かみ影のうつりきて思ひ悲しき春の宵かな  
君さかは涙やすらん伊勢の海のこの波の音こゆるぎの音  
春草のやゝ萌えそめし伊勢の野にわれ旅人と成て來りぬ  
赤き石白き貝なととりあつめさため占なふ佗しき日かな  
いはて只あるも宜しや春の夜の花と添寝の夢のよければ  
此の日頃人に知られぬかことしてわか恥しき星の宵かな  
るり色に光れる星はわか母の瞳のことしなつかしきかな  
わか歌ふ聲ひろごりて夕暗の深きを木曾のたにゝ流れぬ

谷

百合の香に木曾の峽の夜はあけて谷川傳ひ靄の流るゝ  
をもしろく小雨にかすむ峽の宿思ひにこもる人の在すと

L.

F.

此世をは谷に窮まる道のこと思ひて一人もたへをそする  
夕暮の山越えゆけはしらしらと谷間に花の見ゆる淋しさ  
緑葉の風にゆらけはほのかにも銀ひとすちを流す谷川  
ふちの花しつかに散りぬ故郷の谷の姫百合匂ふらんかも  
葉隠れにすゝしの衣のおとなしう谷に百合咲く水無月の日よ  
大いなる懐にしも入れること谷間の道はこころやすかり  
青葉若葉彼谷蔽ふ日となりぬおほつかなげに鳩も鳴らん  
ほの白う麓の谷のけふれるもかなしや夕たにを越ゆれば  
底知らぬ谷にのそみて立てることひと日は心嚴かにあれ

谷のした波立つ下に白々とぬるゝ菌を見出てしよろこひ  
やはらかにさつきの緑ほんのりと水にうつせる初夏の谷  
谷の池みくさに交り河骨そさひしく咲けり物かたりめき

### 森

林にはほうのはな咲き若人の心ときめく日となりにけり  
初なつの濱の松原あはあはと藻を焼く煙たちのほるらん  
はつ夏の木立の上に雲流れ鳥の音もせぬ午後のひととき  
水無月の緑の中に目閉づればみどりの夢の見ゆる心地す  
流れ来てこゝろ一つに鳴く鳥の如く我ゆく夏のはやしに  
日くらしは人のけはひに警かすおたやかになく初夏の森  
夏の来て野にも山にも光あり影ありおほき影にねむらん

初夏の森の朝道しつとりと露にすあしのぬるゝうれしさ  
美はしくさひしき夏の林間に何鳥なればひとりなくらん  
緑こき夏の林にかろかろととき色の花つくるねむのき  
いろつけるほなみけふれるおち方に夏木立うく麥秋の頃  
夏の森新葉をどれどわか心何ともなしにかなしかりけれ  
夏の風林にふけは若葉みな青貝のこと光るとこくさ  
夏くれば丹ぬりの鳥居あは立てる泉しのはゆ下加茂の森